萬葉集略解

十五

柳田文庫
文庫11
A 104
23

萬葉集巻第十五

天平八年丙子夏六月遣使新羅國之時使人等各悲別
贈答及海路之上慟旅陳思作歌并當所誦詠古歌一百
四十五首○贈答歌十一首○秦間滿謌一首○蹔還私
家陳思歌一首○臨發之時歌三首○乘船入海路上作
歌八首○當所誦詠古歌十首○備後国水調郡長井浦
舶泊之夜作歌三首○風速浦船泊之夜作歌二首○安
藝国長門島舶泊礒邊作歌五首○從長門浦舶出之夜
仰觀月光作歌三首

古挽歌

丹比大夫悽愴亡妻挽歌一首并短歌一首○屬物發思
歌一首并短哥二首○周防国玖珂郡麻里布浦行之時

文庫 11
A 104
23
柳田泉文庫
48 10661

作歌八首○過大島鳴門而經再宿之後追作歌二首○熊毛浦船泊之夜作歌四首○佐婆海中忽遭逆風漂流著豐前国下毛郡分閒浦追怛艱難作歌八首○至筑紫館遙望本郷悽愴作歌四首（郷をく郷の誤）○七夕仰觀天漢各陳所思作歌三首○海邊望月作歌九首○到筑前国志摩郡之韓亭作歌六首○引津亭船泊之作歌七首（之の下夜或時の字を脱）○肥前国松浦郡狛島亭船泊之夜作歌七首（狛をく柏の誤）

挽歌

到壹岐島雪連宅滿死去之時歌一首幷短歌二首○葛井連子老作歌一首幷短歌二首○六鯖作歌一首幷短歌二首○到對馬島浅茅浦船泊之時作歌三首○竹敷浦船泊之時作歌十八首○回来筑紫海路入京到幡磨

国家島作歌五首○中臣朝臣宅守娶藏部女嬬狹野茅上娘子之時勅斷流罪配越前国也於是夫婦相嘆易別難會各陳慟情贈荅歌六十三首（契沖云嬬の上更の字脱るか嬬は孃の誤）○臨別娘子悲嘆作歌四首○中臣朝臣宅守上道作歌四首○至配所中臣朝臣宅守作歌十四首○娘子留京悲傷作歌九首○中臣朝臣宅守作歌十三首（守作をく作守の誤）○娘子作歌八首○中臣朝臣宅守更贈歌二首（二をく三の誤）娘子和贈歌二首○中臣朝臣宅守寄花鳥陳思作歌七首（寄をく寄の誤）

遣新羅使人等悲別贈答及海路慟情陳思并當所誦詠之古謌　目録に天平八年丙子夏六月遣使新羅国之時使人等ゝゝと有、陳思の下作歌二字有ゝ、續紀同年四月丙寅遣新羅使阿倍朝臣継麻呂等拝朝、同九年正月辛丑遣新羅使大判官従六位上壬生使主宇太麻呂少判官正七位上大蔵忌寸麻呂等入京、大使従五位下阿倍朝臣継麻呂泊津島卒、副使従六位下大伴宿祢三中染病不得入京とみゆ

武庫能浦乃伊里江能渚鳥羽具久毛流伎美乎波奈禮弖古非爾之奴倍之

むこのうらのいりえのすどりはぐゝもるきみをはなれてこひにしぬべし

武庫は摂津、渚鳥はたゞ洲に居る鳥を云、羽ぐゝもるは、鳥の雛を羽がひに含(くゝむ)を云、巻九秋子をぐゝみし天の鶴むらとてよめり、此哥は吏をさせる役人の妻の別に臨てよめるを

大舩爾伊毋能流毋能爾安良麻勢波羽具久美毋知氐由
可麻之毋能乎
おほぶねにいものるすのふあらませばはぐくみもちてゆかましものを
左のこゝろ云々云之
君之由久海邉乃夜杼爾奇里多多婆安我多知奈氣久伊
伎等之理麻勢
きみがゆくうみべのやどにきりたゝばあがたちなげくいきとしりませ
妻の贈る歌也、神代紀吹棄氣噴之狭霧と見え、其五丈也山きりとわゝる
わがなげくおきその風に霧立わたる
秋佐良婆安比見牟毛能乎奈爾之可毋奇里爾多都倍久
奈氣伎之麻左牟
あきさらばあひみんものをなにしかもきりにたつべくなげきしまさん

大舩乎安流美爾伊多之伊麻須君都追牟許等奈久波也
可敝里麻勢
おほぶねをあるみにいだしいますきみつゝむことなくはやかへりませ
左の答ハなくさむる御まくおくらんかのときの歎しみくしちがくさむせよ之
妻の贈る歌、あるみハあらうみを約る、伊多之の多一本太に作るハよろし
いますハ往ますへ、つゝむとなくハ恙なくさきくいまして、恙三よつ
みやまひあらせぞなどよあめ、恙ハせこりあらめやといつるは使へ
眞幸而伊毛我伊波伴伐於伎都奈美知敝爾多都等母佐
波里安良米也母
まさきくていものいはゞおきつなみちへにたつともさはりあらめやも
左の答ハ妻が幸くあれと齋ひ待るゆえ
和可禮奈婆宇良我奈之家武安我許呂母之多爾乎伎麻

勢多大爾安布麻弖爾
わかれなばうらがなしけんあがころもしたにをきませたゞにあふまでに
妻の贈る歌、あふまでは、きてをれとのをハ略意

和伎母故我之多爾毛伎余等於久理多流許呂母能比毛乎安禮等可米也母
わぎもこがしたにもきよとおくりたるころものひもをあれとかめやも
夫の答ふる也、宣長云之多尓毛の毛ハ乎の誤といへり、あれハ我也

和我由恵爾於毛比奈夜勢曽秋風能布可武曽能都奇安波牟母能由恵
わがゆゑにおもひなやせそあきかぜのふかんそのつきあはんものゆゑ
夫の贈る歌、思痩ることなかれ、あはんものゆゑハ、あはんものなるをといふ也

多久夫須麻新羅邊伊麻須伎美我目乎家布可安須可登伊波比弖麻多牟
たくぶすましらぎへいますきみがめをけふかあすかといはひてまたん
妻の答ふる也、たくぶすまハ枕詞、新羅へのへハえの如く読べし、いますハ往ますて人を敬ふ也、君が目ハ君に見ゆることを云

波呂波呂爾於毛保由流可母之可禮杼毛異情乎安我毛波奈久爾
はろ〴〵におもほゆるかもしかれどもけしきこゝろをあがもはなくに
はろ〴〵ハはるか〳〵也、けしき心ハあだし心といふ同じ、もはなくにのにの詞ハ歎息の詞、前を請て妻の答ふる也

右十一首贈答

由布佐禮婆比具良之伎奈久伊故麻山古延弖曽安我久流伊毛我目乎保里

ゆふさればひぐらしきなくいこまやまこえてぞあがくるいもがめをほり

難波の津より船出する所なるを本居の里へ帰りくよめるなり或は浦はまく
風待をする所で奈良へ帰りし時なるべし

右一首秦間満
此末に秦田満あり、こも間ハ田の誤か又ハ末の田ハ間の誤
のいづれか一文字おちたれば互に誤れるまく同人ならんの

伊毛爾安波受安良婆須敝奈美伊波祢乃伊故麻乃山
乎故延弖曽安我久流

いもにあはずあらばすべなみいはねのいこまのやまをこえてぞあがくる

こは大よ同じければ同人のよめるなるべし、いはねふむ駒よりはゆくとも
おなじけれど伊駒山の岩根をよめるなるべし

右蹔還私家陳思

妹等安里之時者安禮杼毛和可禮弖波許呂母弖佐牟伎

母能爾曽安里家流

いもとあるときはあれどもわかれてはころもでさむきものにぞありける

妹と二人ありし時はさてもありしものをと云

海原爾宇伎祢世武夜者於伎都風伊多久奈布吉曽妹毛
安良奈久爾

うなばらにうきねせんよはおきつかぜいたくなふきそいもあらなくに

大伴能美津爾布奈能里許藝出而者伊都禮乃思麻爾伊
保里世武和禮

おほとものみつにふなのりこぎでてはいづれのしまにいほりせんわれ

大ともの枕詞

右三首臨發之時作歌

之保麻都等安里家流布禰乎思良受志弖久夜之久妹乎

和可禮伎爾家利
志ほまつとありける舟を志らずしてくやしくいもをわかれきにけり
かく潮待してとゞまりなんと志らバなほ良くいとまごひすべきをのちなりと

安佐妣良伎許藝弖天久禮婆牟故能宇良能之保非能可
多爾多豆我許惠須毛
あさびらきこぎでくればむこのうらの志ほひのかたにたづがこゑすも
あさびらきハあしたに舟を發すをいふ後の朝ぼらけとハ異也

和伎母故我可多美爾見牟乎印南都麻之良奈美多加彌
與曽爾可母美牟
わぎもこがかたみにみんをいなみつま志らなみたかみよそにかもみん
巻三印南都麻をよめり、巻六伊奈美嬬辛荷の嶋とよめり、播
磨の印南つま也、都ハ助辭、麻ハ島の畧語なりと翁いはれき、或

人の説に好忠集に、さゝきつまもどのきさゝりせのまつかげにえりさして氏の志ら
ざなみしもとよめるさゝきハ近江の地名なれバつまハ島をもあつかひいへる
のといへり、こハ巻三まのあたりのを見しとそしせか、その意ハ妹の方の京都を
ふる妹が形見にミんを、立浪のよそにのみ見るを歎くなり、さく妹がかたみと
いふよめりつまでかくれるなりん

和多都美能於伎都之良奈美多知久良思安麻乎等女等
母思麻我久流見由
わたつみのおきつしらなみたちくらしあまをとめどもしまがくるみゆ
あまのを舟の浦まのくるしきをかくよめるなり

奴波多麻能欲波安氣奴良之多麻能宇良爾安佐里須流
多豆奈伎和多流奈里
ぬばたまのよハあけぬらしたまのうらにあさりするたづなきわたるなり

契沖云巻九紀伊国にも、わがこふる妹にあはさずて玉の浦にとよめれど、此玉浦は次下の三首備中備後の地なれば、これは備前備中の内なるべし、此巻下にもたまの浦をよめる歌は周防国玖珂郡麻里布浦行之時作歌八首にあればあきなどにもいふべけれど、此国の次でによむべきにあらずといへり、猶考べし

月余美能。比可里乎伎欲美。神島乃。伊素未乃宇良由。船出須和禮波

つきよみのひかりをきよみかみしまのいそまのうらゆふなでするわれは

月よみとて別月之神。名は神名帳備中小田郡神島神社あり、そこなるべし、いそまのうらは磯のうらまなどもよみて、浦をいふ。巻十三備後国神島濱調使首見屍作歌と端にある歌も、備中を備後と誤れることと契沖いへり、船出せむとは、此浦よりはじめて殊にはあしく磯ぎはを離るゝ舟をまづ漕出るをいふ

波奈禮蘇爾。多氐流牟漏能木。宇多我多毛。比左之伎時乎。須疑爾家流香母

はなれそにたてるむろのきうたがたもひさしきときをすぎにけるかも

むろの木は檉之、巻三鞆の浦の磯の室の木とよめる、則備後の鞆の浦のそこ此をあれそとよめるも同じ所なるべし、うたがたは巻十二うたがたもいひつゝもまことのよあれやそこにまたあしくせりあやふきことを云、離れそる磯際にあやしげに独く立てる木を見て、さく妹におくれしあれはまつる程にふとおもへるなるへん

之麻思久母。比等利安里宇流。毛能爾安禮也。之麻能牟漏能木。波奈禮弖安流良武

しましくもひとりありうるものにあれやしまのむろのきはなれてあるらん

しましくは暫くも也、大の歌に同じここ

右八首乗船入海路上作歌

當所誦詠古哥

安乎爾余志奈良能美夜古爾多奈妣家流安麻能之良久毛見禮杼安可奴加毛

あをによしならのみやこにたなびけるあまのしらくもみれどあかぬかも

此哥より下十八首は古哥也。かくて詠雲哥あるを以て奈良の都の恋しきをきゝつけく誦しけるなるべし。三首の白雲を船にてつねふりかへれども見えづらしやぎみとよめるに似たり

右一首詠雲

安乎楊疑能延太伎里於呂之湯種蒔忌忌伎美爾故非和多流香母

あをやぎのえだきりおろしゆだねまきゆゝしききみにこひわたるかも

此考アリ

柳の枝葉ひろごりたる田に水かゝるを伐て、ゆだねは斎種(イミダネ)にて水口祭をいふなるべく、いはひてまきて苗代に植もゆるかねまくあらきのをゆるしよめり。ゆゝしくは忌くかしこむ事によいて上はゆゝしといはん為の序也。室生に此事の旬のことは千づく里ま伎よしき寺井を板井の事にて柳を折りて、其柳の枝を伐なるに、尤ねつるべくいは霊をおろして苗代の田にそゝぐ水を汲てするなれかたうそ柳を他本をまなぶ、此哥柳の枝きりおろしといふはこれをいつたもの也又考べし

妹我素弖和可禮弖比左爾奈里奴禮杼比登比母伊毛乎和須禮弖於毛倍也

いもがそでわかれてひさになりぬれどひとひもいもをわすれておもへや

おもへやはおもへるはおもはんやと

和多都美乃宇美爾伊弖多流思可麻河泊多延無日爾許曽安我故非夜麻米

わたつみのうみにいでたる志かまがはたえんひにこそあがこひやまめ
いづくにても湊の川ハ海に出るなれど、播磨の飾磨川ハ海にも絶ずといはんとて
いつか志まに二人のるの天つゝみてねるひのうせなん日こそこひのやまめん

右三首戀歌

多麻藻可流乎等女乎須疑氐奈都久佐能野島我左吉爾伊保里須和禮波
たまもかるをとめをすぎてなつくさののしまがさきにいほりすわれは

柿本朝臣人麻呂歌曰敏馬乎須疑氐又曰布禰知可豆伎奴

此うたの下四首巻三に出てゐる歌也二の句と結句を暗に誦しあやまれるべし

之路多倍能藤江能宇良爾伊射里須流安麻等也見良武多妣由久和禮乎

志ろたへのふぢえのうらにいざりするあまとやみらんたびゆくわれを

柿本朝臣人麻呂歌曰安良多倍乃又曰須受吉都流安麻等香見良武

安麻射可流比奈乃奈我道乎孤悲久禮婆安可思能門欲里伊敝乃安多里見由
あまざかるひなのながちをこひくればあかしのとよりいへのあたりみゆ

柿本朝臣人麻呂歌曰夜麻等思麻見由

巻三になががち従ゆとあり

武庫能宇美能爾波余久安良之伊射里須流安麻能都里船奈美能宇倍由見由
むこのうみのにはよくあらしいざりするあまのつりぶねなみのうへゆみゆ

柿本朝臣人麻呂歌曰氣比乃宇美能又曰可里許毛能

美太禮氏出見由安麻能都里船

巻三にいでたり

安胡乃宇良爾布奈能里須良牟乎等女良我安可毛能須素爾之保美都良武賀

あごのうらにふなのりすらむをとめらがあかものすそにしほみつらんか

柿本朝臣人麻呂歌曰安美能宇良又曰多麻毋能須蘇爾

巻一鳴呼見乃浦にとある見ハ見の誤なるべく、志摩の英虞(アゴ)の浦なれバ、こゝに安胡とあるを正しとすべし、左注ハこれを證にかゝれバ後人の手さぎなすまじきものなり

七夕歌一首

於保夫禰爾麻可治之自奴伎宇奈波良乎許藝弖天和多

流月人乎登祜

おほぶねにまかぢしじぬきうなばらをこぎでてわたるつきひとをとこ

右柿本朝臣人麻呂歌

此ハ巻十人麿集の七夕三十八首ある中に見えて月人をとこハ牽牛をよめることにて、遣新羅使人の海渡るにおもひよせて誦しけるにや、又おもふに月人をとこハ月をいふ也、海の月を詠るこの歌を後に牽牛の事とおもひて七夕歌と注せるにや

備後國水調(ミツキ)郡長井浦船泊之夜作歌三首

安乎爾與之奈良能美也故爾由久比等毛我母久佐麻久良多妣由久布禰能登麻利都氣武仁　旋頭歌也

あをによしならのみやこにゆくひともがもくさまくらたびゆくふねのとまりつげんに

水調和名抄にハ御調とあて、海路よく奈良の都へ行人もまさまさバ我舟
の泊る所を告やらんとのこゝろ

右一首大判官　壬生使主宇太麻呂

海原乎夜蘇之麻我久里伎奴禮杼母奈良能美也故波和
須禮可禰都母

うなばらをやそしまがくりきぬれどもならのみやこハわすれかねつも

八十島ハ海路に島多くの島々をいふ、さてその島々に舟の隠るゝ
を度る都の方も見えぬまで来りたるを歎てよめり

可敝流散爾伊母爾見勢武爾和多都美乃於伎都白玉比
利比弖由賀奈

かへるさにいもにみせんにわたつみのおきつしらたまひろひてゆかん

拾ひて行んと

風速浦舶泊之夜作歌二首　和名抄安藝國高田郡風速とあり

和我由惠仁妹奈氣久良之風早能宇良能於伎敝爾奇里
多奈妣家利

わがゆゑにいもなげくらしかざはやのうらのおきべにきりたなびけり

おきべハ沖方也、上に君がゆく海べのやどにきりたゝバあがたちなげくいきと
しりませとよめるをおもひあはせて見るべし

於伎都加是伊多久布伎勢波和伎毛故我奈氣伎能奇里
爾安可麻之母能乎

おきつかぜいたくふきせばわぎもこがなげきのきりにあかましものを

沖つかぜハ風の起る後ひく心とのことも、きりハくもの紛ゆゑ、こゝもこの君
が紛こゝのこゝろふかくよみたれバ二首同じ人の心なるべし

安藝國長門島船泊礒邊作哥五首

伊波婆之流多伎毛登杼呂爾鳴蟬乃許惠乎之伎氣婆京師之於毛保由

いはゞしるたぎもとゞろになくせみのこゑをしきけばみやこしおもほゆ

此の磯山の峰をよめるなるべし

右一首大石蓑麻呂

夜麻河泊能伎欲吉可波世爾安蘇倍杼母奈良能美夜古波和須禮可禰都母

やまがはのきよきかはせにあそべどもならのみやこはわすれかねつも

磯山川の海へ出る湊に船泊せし時なるべし

伊蘇乃麻由多藝都山河多延受安良婆麻多母安比見牟秋加多麻氣氏

いそのまゆたぎつやまがはたえずあらばまたもあひみんあきかたまけて

いそのまゆハ石間従也、もとの意ハなるべく身の思ふまゝにと山川のたえずゆかんよせかれバ絶ぬごとく、山川のめぐりをとめあかず余幸くハ此所を又もまいりこんといふをきこゆるべし、ゆきはげしくをよめれバ秋のころ向ひくとよのをきつく秋のまたてよいつり

故悲思氣美奈具左米可禰氏比具良之能奈久之麻可氣爾伊保利須流可母

こひしげみなぐさめかねてひぐらしのなくしまかげにいほりするかも

恋の繁さよ慰めかねて清き川にて遊びしとよめる也

かくもよめる

和我伊能知乎奈我刀能之麻能小松原伊久與乎倍弖加可武佐備和多流

わがいのちをながとのしまのこまつばらいくよをへてかかんさびわたる

老木の松となりてかくハ小松原なりしを時ひさしくなりぬるにさて小
松の世々を経てたびさるやく、吾君もちよの御いのちつゝ

従長門浦船出之夜仰觀月光作歌三首　安藝の長門の浦也

月余美乃比可里乎伎欲美由布奈藝爾加古能古惠欲妣
宇良未許具可母

つきよみのひかりをきよみゆふなぎにかこのこゑよびうらまこぐかも

伎欲の下の美一本見に作る、かこハ水手沙手といへり

山乃波爾月可多夫氣婆伊射里須流安麻能等毛之備於伎
爾奈都佐布

やまのはにつきかたぶけばいざりするあまのともしびおきになづさふ

山のはハ山の端也、山際とあるもハ昊也、なづさふハ浪の上にうかぶ
のみいへり

古ヲ右ニ誤　敝ヲ敞ニ誤

和禮乃未夜欲布禰波許具登於毛敝禮婆於伎敝能可多
爾可治能於等須奈里

われのみやよふねはこぐとおもへればおきへのかたにかぢのおとすなり

古挽歌一首并短歌

古本右ニ誤る、古本によりて改

そもし此時舟の中にて誦したるなるべし、古

由布佐禮婆安之敝爾佐和伎安氣久禮婆於伎爾奈都佐
布可母須良母都麻等多具比弖和我尾爾波之毛奈布里
ゆふされはあしべにさわぎあけくればおきになづさ
ふかもすらもつまとたぐひてわがをにはしもなふりそ
曽等之路多倍乃波禰左之可倍氐宇知波良比左宿等布
そとしろたへのはねさしかへてうちはらひさぬとふ
毛能乎由久美都能可敝良奴其等久布久可是能美延奴

そのをゆくみづのかへらぬごとく、ふく、かぜのみえぬ
我其登久安刀毛奈吉與能比登爾之弖和可禮爾之伊毛
がごとく、あともなきよのひとにして、わかれにしいも
我伎世弖思奈禮其呂母蘇弖加多思吉氏比登里可母禰
がきせてしなれごろも、そでかたしきてひとりかもね

傘 む

鳥のたねをとといへれバ、その可毋ハ鶴をいへるにて、又鳥のあるふよめく
かくいへるにや、羽ねさしのべてうちちらしひ、鴨にも羽をおそくひつさし
かつてのさん、巻三、猿の池のいりえめぐれるかもとて、むものとてまひそり
妹かくて、巻九、妹むのとせきの池にかけでたねざる、おのの尾にふれ
おける霜を拂ふとならし、あゆも、さらあるはものとハ、さん数ゆゑそて、

度ることいふそのをえ行水のかへらぬごとく、巻十九悲世間無常歌に、
逝水のとまらぬがごとよめり、なれ衣ハ着穢せる衣をいふ、巻十沽滑風
あくればいつまでの衣きつゝきやのひとりねん

反歌一首

多都我奈伎安之敝乎左之弖等妣和多類安奈多頭多頭
志比等里佐奴禮婆
たづのなきあしべをさしてとびわたるあなたづ〳〵しひとりさぬれば

よハ鶴の葦べをさして鳴て渡るをかくいひて、さてそれよりたづ〳〵しく
たづ〳〵しといへる序とせり、源氏物語須磨に、たづのなきこゑをあひたれ
をぞちくとよめるハ鶴ハ鳴ことなきこゑを重ねるふくごとハ夫人ちる
るゞしハ其羽のあしきの羽頭こし、其下より道たづ〳〵しちぐ
いとくたどりくしき之源氏物語六帖本とりくしてハ妹ちなくて

よちふなきにちらるゝ

右丹比大夫悽愴亡妻歌

屬物發思歌一首并短歌

安佐散禮婆伊毛我手爾麻久可我美奈須美津能波麻備
あさくれは いもがてにまく かゞみなす みつのはまび
爾於保夫禰爾眞可治之自奴伎可良久爾和多理由加
にかほぶねに まかぢしじぬき からくにゝ わたりゆか
武等多大年可布美奴面乎左指天之保麻知弖美乎妣伎
むとたゞむかふ みぬめをさして しほまちて みをびき
由氣婆於伎敝爾波之良奈美多可美宇良未欲理許藝弖
ゆけば おきべには しらなみたかみ うらまよりこぎて
和多禮婆和伎毛故爾安波治乃之麻波由布左禮婆久毛

わたれば わぎもこに あはぢのしまは ゆふされば くも
為可久里奴左欲布氣弖由久敝乎之良爾安我己許呂安
ゐかくりぬ さよふけて ゆくへをしらに あがこゝろ あ
可志能宇良爾布禰等米弖宇伎禰乎詞都追和多都美能
かしのうらに ふねとめて うきねをしつゝ わたつみの
於枳都敝乎見禮婆伊射理須流安麻能乎等女波小船乘都
おきべをみれば いざりする あまのをとめは をぶねのりつ
良良爾宇家里安香等吉能之保美知久禮婆安之辨爾波
らゝにうけり あかときの しほみちくれば あしべには
多豆奈伎和多流
たづなきわたる

妹が手にまくハ鏡に紐ありてそれをとるに纏へバ也。美はハ難波の御津へ

巻四臣女のくしげにのれる鏡なす見津の浜べにとよめり、清きといふの、
又ハ御津の湊のわたり鏡のごとく光のうつしなるべし、宣長云、鏡ちふハたゞ見
といふ序のみ、清きといふハかろしといへり、猶考べし、浜備ハ浜方也、ぬ
め巻六ハあきらの浦をさしてむかふみぬめの浦とよめり、かしこくよし、ことを
ひき、和名抄水脈船美乎比佐能布祢とあり、玄蕃式蕃客朝貢の時宣
命ニ、参上来留客等参近奴、水脈母教導賜登宣随尔迎賜波久
宣とあるを、水筋を導き行をいふ、やがてあるあをぢの港、吾妹子に逢
とのべる枕詞へ、さかしまにかけて行くをいふに、夜更く舟の行方と知えへ、
あぢむらとつゞけるハ、宣長云人ハ鴨のあきをむねとするむれよりで
くるへ、集中吾心清すみの池のといへるも同じといへり、都良久ハ連りくし、
糸車のせみのつらく枝といへるに同じ

安左奈藝爾布奈弖乎世牟等船人毛鹿子毛許恵欲妣柔

あさなぎにふなでをせんとふなびともかこもこゑよびふ
保等里能奈豆左比由氣婆伊敝之麻婆久毛爲爾美延奴
ほどりのなづさひゆけバいへしまハくもゐにみえぬ
安我毛敝流許巳呂奈具也等波夜久伎弖美牟等毛比
あがもへるこゝろなぐやとはやくきてみんとおもひ
弖於保夫禰乎許藝和我由氣婆於伎都奈美多可久多知
ておほふねをこぎわがゆけバおきつなみたかくたち
伎奴與曽能未爾見都追須疑由伎多麻能宇良爾布禰乎
きぬよそのみにみつゝすぎゆきたまのうらにふねを
等杼米弖波麻備欲里宇良伊蘇乎見都追奈久古奈須禰
とゞめてはまびよりうらいそをみつゝなくこなすね
能未之奈可由和多都美能多麻伎能多麻乎伊敝都刀爾

のみしなのゆ、わたつみのたまきのたまをいへづとに

伊毛爾也良牟等比里比等里素弖爾波伊禮弖可敝之也

いもにやらんとひろひとりそでにはいれてかへしや

流都可比奈家禮婆毛弖禮杼毛之留思乎奈美等麻多於

るつかひなければもてれどもしるしをなみとまたお

伎都流可毛

きつるかも

鹿子ハ借字にて水手也、和名抄舟子 附水手 文選江賦云舟子 布奈古 かこ、

かこハ檝子(カヂコ)也、かぢとりの稱詞、あづまよりつくる也、いにしへハ續後紀第九播磨揖

保郡家島とて、昔ハもろこしの家の島ありそのくにもよありし、いなぐやしハ

いかにさむやより、おきつのゆけむハ漕て我ゆけハ也、たまの浦ハよるの出、

あしたあさハ注そのかくに、昔をあてて葉むかひ来あてて、つかひ、

なかゆハ所泣(ナカユ)也、わたつみハ海神、たまきハ手纏なり、ひぢ釧也、字ハ古事記

傳にくはし、仁徳紀田道ハ蝦夷と戰て死しける時有從者取得田道之

手纏与其妻乃抱手纏而縊死、三代実録貞観十二年の條に勅充壹岐島曽

弟手纏各二百具、和名抄 鞲 多末岐 一云小手也、あはれにいとゞいふ小手のごとく

なる物にてこれをもて又弓を手結といふなるにや、昔ハ丈夫の手結の浦

とてなかまくと又ゆ、昔ハわたつみの手にまきもたる珠をもきよくて

家にて、ひろひハ拾ひ也、よてまを、妹にやらんと玉を拾ひとれど、海路より

ことづてやるべき使のなければ持れどもかひなくして、そのしるしとみるべきもの

またおきつるとも

反歌二首

多麻能宇良能於伎都之良多麻比利敝禮杼麻多曾於伎

都流見流比等乎奈美

たまのをのおきつるまひとつれど、まそでおきつるころひとつに
見る人ハ別妹をいふ
安伎左良婆和我布禰波弖牟和須禮我比與世伎弖於家
禮於伎都之良奈美
あきさらばわがふねはてんわすれがひよせきておけれおきつしらなみ
秋さらバ舟泊ん、其時とて見るもひろはん、らを拾よせおけと浪にいへり
それまで子よまりおくれハおきてあれと云いへり
周防國玖珂郡麻里布浦行之時作歌八首　鞠生今ハ作波野之
真可治奴伎布禰之由加受波見禮杼安可奴麻里布能宇
良爾也杼里世麻之乎
まかぢぬきふねしゆかずハみれどあかぬまりふのうらにやどりせましを
ゆかずりゆる舶なるべのうち年々年ふ語

伊都之可母見牟等於毛比師安波之麻乎與曾爾也故非
無由久與思乎奈美
いつしかもみんとおもひしあはしまをよそにやこひんゆくよしをなみ
あはしまハ巻三巻四巻七巻十二にもよめり、巻九にハ粟の小島とよめり
大船爾可之布里多弖天波麻藝欲伎麻里布能宇良爾也
杼里可世麻之
おほぶねにかしふりたてゝはまぎよきまりふのうらにやどりかせまし
巻七舟をこぎかしふりたてゝとあるかし、ハ舟つなぐ木之股といへり
安波思麻能安波自等於毛布伊毛爾安禮也夜須伊毛禰
受弖安我故非和多流
あはしまのあはじとおもふいもにあれややすいもねずてあがこひわたる
妹があはじと思ひにあるものをあはんと思ふ妹があればこそ、やすいもねられぬ、となり

おなじく

筑紫道能可太能於保之麻思末志久母見禰婆古非思吉
伊毛乎於伎弖伎奴

つくしぢのかたのおほしましまくもみねばこひしきいもをおきてきぬ

周防の大島郡あれば筑紫への道なれば筑紫道といふなり

しまとうけてしましくといへり、しましくハ暫也

伊毛我伊敝治知可久安里世婆見禮杼安可奴麻理布能
宇良乎見世麻思毛能乎

いもがいへぢちかくありせばみれどあかぬまりふのうらをみせましものを

伊敝妣等波可敝里波也許等伊波比之麻伊波比麻都良
牟多妣由久和禮乎

いへびとはかへりはやこといはひじまいはひまつらんたびゆくわれを

いはひ嶋も祝の所のかへりこんことハ早帰れと云、その名によせて
ゝ斎待とのいひくしる也

久左麻久良多妣由久比等乎伊波比之麻伊久与布流末
弖伊波比伊家牟

くさまくらたびゆくひとをいはひじまいくよふるまでいはひきたりけん

昔より旅行人を幾代経るまで離ありて嶋の名を負ひけんと也

過大島鳴門而經再宿之後追作歌二首　周防大島郡の瀬也

巨禮也己能名爾於布奈流門能宇頭之保爾多麻毛可流
登布安麻乎等女杼毛

これやこのなにおふなるとのうづしほにたまもかるとふあまをとめども

これやこのハ是や彼の、うづしほハ捿の字、宇豆の渦にてぐるぐる
とめぐりてうづをまきいだすなれば汐の盈満する時水をさ

をくなるをとゝのづ役とらまし、室ちうちつづかつまものうで一つく、こるきさき
とききぬ、古紀雄略十五年詔聚秦民賜於秦酒公、公仍領率百八十種勝奉獻庸調御調也、絹縑充積朝庭、因賜姓曰禹豆麻佐（ウヅマサ）一云禹豆母利麻佐、皆盈積之貌也 とし みりと
いつか、ゝのうこきは多く薩州よりいづるをさまへゆ及しとて、そびえて
ゑくよあるそ

右一首田邊秋庭

奈美能宇倍尒宇伎祢世之欲比安杼毛倍香許己呂我奈之久伊米尒美要都流

なみのうへにうきねせしよひあどもへかこゝろがなしくいめにみえつる

巻十四安杼毛敷可あどくま山のゆづるをのとよみあるかも、あどもへか
何と思へばのことにて、杼の濁音のこと多く用ひられば、誘（アトモフ）といふ義とはちがへて、
まよわぎてかづらふおもへらぬなれどもの一首もおちまで伊家おもひゆるとし

敝ヲ敞ニ誤

熊毛（クマゲ）浦船泊之夜作歌四首

よみ人ハ此に作者を脱せり

和名抄周防熊毛郡熊毛にあり

美夜故邊尒由可牟船毛我可里許母能美大禮弖於毛布許登都礙夜良牟

みやこべにゆかんふねもがかりこものみだれておもふことつげやらむ

此下に作者をおもてらえ先ならんと

右一首羽栗（ハグリ）

続紀宝字五年羽栗翔（カケル）といふ人見ゆ、もしこれか、名脱たるにこの

安可等伎能伊敝胡悲之伎尒宇良末欲理可治乃於等須流波安麻乎等女可母

あかときのいへこひしきにうらまよりかぢのおとするはあまをとめかも

於伎敝欲理之保美知久良之可良能宇良尒安佐里須流多豆奈伎弖佐和伎奴

おきへよりしほみちくらしからのうらにあさりするたづなきてさわぎぬ
からの浦は筑前韓泊なり。志摩郡よりこのさき一里程ありとぞ
於吉敝欲里布奈妣等能煩流與妣與勢伊射都氣也良
牟多婢能也登里乎
わきへよりふなびとのぼるよびよせていざつげやらんたびのやどりを
一云多妣能夜杼里乎伊射都氣夜良奈
舟人にこと傳くは、舟泊りしたりとなん家へしらせやらんとなり
佐婆海中忽遭逆風漲浪漂流經宿而後幸得順風到著
豊前國下毛郡分間浦於是追怛艱難悽惆作歌八首
和名抄周防佐波郡 波宜 馬 豊前上毛郡 加牟豆美介 下毛とあり下毛は訓有しとぞ上毛
小雅ごし、分間浦は下毛郡なり。分間をまとも、わましもいへりとぞ
於保伎美能美許等可之故美於保夫祢能由伎能麻爾末

爾夜杼里須流可母
おほきみのみことかしこみおほぶねのゆきのまにまにやどりするかも
大船の漕このれ行まゝなり
右一首雪宅麻呂　下に雪連宅麻呂とあり雪は壹岐氏なるべし和名
抄に壹岐 由吉 とあり
和伎毛故波伴也母許奴可登麻都良牟乎於伎爾也須麻
牟伊敝都可敝之旦
わぎもこははやもこぬかとまつらんをおきにやすまんいへつかずして
妹は早くも来れかしと待べきを、家にも帰らずして、海路にのみ月日を経るとにや
いつくは秋にきづゝまると集中 秋附とよめるがよし
宇良未欲里許藝許之布祢乎風波夜美於伎都美宇良爾
夜杼里須流可毛

うらまよりこぎこしふねをかぜはやみおきつみうらにやどりするかも

おきつみうらハ沖中の嶋の浦べ、ここらのこハ其のことく

和伎毛故我伊可爾於毛倍可奴婆多末能比登欲毛於知受伊米爾之美由流

わぎもこがいかにおもへかぬばたまのひとよもおちずいめにしみゆる

いのちに物を思へばのく

宇奈波良能於伎敝爾等毛之伊射流火波安可之弖登母世夜麻登思麻見無

うなばらのおきべにともしいざるひはあかしてともせやまとじまみむ

沖方に漁する火を明くともせ、らくく汝ゆまてあかし治矣とのりハやまと

しまハ巻二にやまとしま根とよめる也

可母自毛能宇伎禰乎須禮婆美奈能和多可具呂伎可美

爾都由曽於伎爾家類

かもじものうきねをすればみなのわたかぐろきかみにつゆぞおきにける

かぐろをのかみのかゝ称

比左可多能安麻弖流月波見都禮杼母安我母布伊毛爾安波奴許呂可毛

ひさかたのあまてるつきはみつれどもあがもふいもにあはぬころかも

こうれども旅見よく月ハ見れども思ふ妹にハ逢といふの、又満れどもよく

日数のかさなることをもあんじこの

奴波多麻能欲和多流月者波夜毛伊弖奴香文宇奈波良能夜蘇之麻能宇倍由伊毛我安多里見牟　旋頭歌也

ぬばたまのよわたるつきははやもいでぬかもうなばらのやそしまのうへゆいもがあたりみむ

のぞみてハむよめりし之

至筑紫館遥望本郷悽愴作歌四首

之賀能安麻能一日毛於知受也久之保能可良伎孤悲乎
母安禮波須流香母

しかのあまのひとひもおちずやくしほのからきこひをもあれはするかも

志かのハ筑前糟屋郡也、集中鹿とかけるもあれバかを清べし、云
からきこひといはん序のミ

思可能宇良爾伊射里須流安麻伊敝妣等能麻知古布良
牟爾安可思都流宇乎

しかのうらにいさりするあまいへびとのまちこふらんにあかしつるうを

あま人ハ海人の、いへびとハ家人也、あかしつるうをハ魚も喩にして、旅をゆくよも
しく治をうしいつ之我ハみをよみかふよかくいハ我ぞ旅へ限りしありけなるを人

あかしつるうをとハ海人のよしさるふ家人の待らんをもしらぬ
ことよ、我らハよめるこゝろハ我もかくをる絶るともおもふべし上の
あまにてとらせやるとしまへゆとよめるとおもへば、さらにあかぬるもの

可之布江爾多豆奈吉和多流之可能宇良爾於枳都之良
奈美多知之久良思毛

かしふえにたづなきわたるしかのうらにおきつしらなみたちしくらしも

かしぶ江知るべし、しかの浦ハ志かの海ふほど、たちしくらしハ立重らしまで、
もハ添ふる詞のミ

一云美知之伎奴良思　みちしきハ満重之

伊麻欲里波安伎豆吉奴良之安思比奇能夜麻末都可氣
爾日具良之奈伎奴

いまよりハあきづきぬらしあしびきのやままつかげにひぐらしなきぬ

敝ハ敞ノ誤

七夕仰観天漢各陳所思作歌三首

安伎波疑爾爾保敝流和我母奴禮奴等母伎美我美布禰能都奈之等理弖婆

あきはぎににほへるわがもぬれぬともきみがみふねのつなしとりてば

わがもハ吾裳也　織女よりかけてよめる也　彦星を待ちかねて舟の纜をとりてと

たらバ萌子ヨりおもひハせし　裳ハよしぬるともいひたるなり

右一首大使

等之爾安里弖比等欲伊母爾安布比故保思母和禮爾麻佐里弖於毛布良米也母

としにありてひとよいもにあふひこぼしもわれにまさりておもふらめやも

一年をまちてく

由布豆久欲可氣多知與里安比安麻能我波許具布奈妣等乎見流我等母之佐

ゆふづくよかげたちよりあひあまのがはこぐふなびとをみるがともしさ

夕月の影ハさしても夜半にハ入る　夕月とたちよる星の影ハ夜半一夜なれバ

つゝきてこぐふなびとハうらやましき也

海邊望月作歌九首

安伎可是波比爾家爾布伎奴和伎毛故波伊都登加和禮乎伊波比麻都良牟

あきかぜはひにけにふきぬわぎもこはいつとかわれをいはひまつらん

大使之第二男

可牟佐夫流安良都能左伎爾與須流奈美麻奈久也伊毛爾故非和多里奈牟

かんさぶるあらつのさきによするなみまなくやいもにこひわたりなん

和名抄筑前宗像郡小荒大荒の二郷あり、是なり、さて上代よりありきたる地なれば
神をまつるとよめるこの上は名あてといはん序のみ

右一首土師稲足（ハニシノイナタリ）

可是能牟多與世久流奈美爾伊射里須流安麻乎等女良
我毛能須素奴禮奴

かぜのむたよせくるなみにいさりするあまをとめらがものすそぬれぬ

むたハ共の事

一云安麻乃乎等賣我毛能須蘇奴禮濃（ヌ）

安麻能波良布里佐氣見禮婆欲曾布氣爾家流與之恵也
之比等里奴流欲波安氣婆安氣奴等母

あまのはらふりさけみればよぞふけにけるよしゑやしひとりぬるよはあけばあけぬとも

右一首旋頭歌也

和多都美能於伎都奈波能里久流等伎登伊毛我麻都良
牟月者倍爾都追

わたつみのおきつなはのりくるときといもがまつらんつきはへにつつ

なはのりハ今世のかとふものなり、それのへなハ歴なり、上ハ下の語をときくるといはん序なりけり

之可能宇良爾伊射里須流安麻安氣久禮婆宇良未許具
良之可治能於等伎許由

しかのうらにいさりするあまあけくればうらまこぐらしかぢのおときこゆ

あけくれバハあくれバ

伊母乎於毛比伊能禰良延奴爾安可等吉能安左宜理其
母理可里我禰曾奈久

いもをおもひいのねらえぬにあかときのあさぎりごもりかりがねぞなく

良の上禰をそ本禮に誤れり、ねらえぬにハねられぬにと

由布佐禮婆安伎可是左牟思和伎母故我等伎安良比其呂母由伎弖波也伎牟

ゆふされバあきかぜさむしわぎもこがときあらひごろもゆきてはやきん

ときあらひごろもハ解洗衣也

和我多妣波比左思久安良思許能安我家流伊毛我許呂母能阿可都久見禮婆

わがたびハひさしくあらしこのあがけるいものころものあかづくみれば

このあがけるハ此我着るといふて、妹がきぬをわがきてなぐさむとおもへど垢付るを見て旅の久しきをしりぬ也、巻廿に旅とへど真旅（麻多妣）になりぬ家の妹（もが）きせしころもにあかつきにかりとよめるにおなじ

到筑前國志麻郡之韓亭（カラノウマヤニ）舶泊經三日於時夜月之光皎皎流照奄對此華旅情悽噎各陳心緒聊以裁歌六首

和名抄筑前志摩郡韓良（カラ）、華の字上物の字脱たるの、ゑふも物華とあり

於保伎美能等保能美可度登於毛敞禮杼氣奈我久之安禮婆古非爾家流可母

おほきみのとほのみかどゝおもへれどけながくしあればこひにけるかも

遠のみかどハ既にいへり、こゝハ太宰をさしていへり、日久しく来つれバ故郷の恋しきと也

右一首大使

多妣爾安禮杼欲流波火等毛之乎流和禮乎也未爾也伊毛我古非都追安流良牟

たびにあれどよるハひともしをるわれをやみにやいもがこひつゝあるらん

我ハ旅にあれど夜ハ燭してあるを、留れる妹ハ心の闇に迷てやあらんとなり

右一首大判官

可良等麻里能許乃宇良奈美多多奴日者安禮杼母伊敝爾古非奴日者奈之

からどまりのこのうらなみたゝぬひはあれどもいへにこひぬひはなし

からどまりは右にいへる韓亭なり又同国早良郡能解計乃と和名抄にみゆれば此の能許は能計の誤なるべし

ちかくてある昔へは朝野群載中右記などに能古島とあればさてもよろし

むかしからどまりちかくしておもてには捷衣の浦なりかくしるしてをさす

どまりいづくなりと行人のゆくへはとしてしらするにかゝる所の例

あまたのはかなと云のさへ嫁こひしいふ事ど古へ集ともぞがらそのうらにて

ぬひはあれどもいへこひぬひはなしといふをとかせる也

奴婆多麻乃欲和多流月爾安良麻世婆伊敝奈流伊毛爾安比弖許麻之乎

ぬばたまのよわたるつきにあらませばいへなるいもにあひてこましを

あひてましをと

比左可多能月者弖利多里伊刀麻奈久安麻能伊射里波等毛之安敝里見由

ひさかたのつきはてりたりいとまなくあまのいざりはともしあへりみゆ

ともしあへりは月の光と漁火の光あへる也

可是布氣婆於吉都思良奈美可之故美等能許能等麻里爾安麻多欲曾奴流

かぜふけばおきつしらなみかしこみとのこのとまりにあまたよぞぬる

引津亭舶泊之作歌七首　之の下夜或は時の字を脱せり引津は筑前也

久左麻久良多婢乎久流之美故非乎禮婆可也能山邊爾草乎思香奈久毛

くさまくらたびをくるしみこひをればかやのやまべにさをしかなくも

筑前志摩郡可也山と訓山をいふこと国人貝原篤信いへり

於吉都奈美多可久多都日爾安敝利伎等美夜古能比等
波伎吉弖家牟可母

おきつなみたかくたつひにあへりきとみやこのひとはききてけんかも

浪たかくたつひにあひしよと京の人はきゝてしやといふ也

右二首大判官

安麻等夫也可里乎都可比爾衣弖之可母奈良能彌夜古
爾許登都礙夜良武

あまとぶやかりをつかひにえてしかもならのみやこにことつげやらん

言告やらんは旅のおもひをかしこまりて人まろのよろこびおもひてよめりと
又はこひのつかひは古事記阿麻登夫登理母都加比曽

秋野乎爾保波須波疑波佐家禮杼母見流之留思奈之多
婢爾師安禮婆

あきのをにほはすはぎはさけれどもみるしるしなしたびにしあれば

旅にあればみるしるしもなしと也

伊毛乎於毛比伊能禰良延奴爾安伎乃野爾草乎思香奈伎
都追麻於毛比可禰弖

いもをおもひいのねらえぬにあきののにさをしかなきつつまおもひかねて

妻をおもひかねて啼也

於保夫禰爾真可治之自奴伎等吉麻都等和禮波於毛倍
杼月曾倍爾家流

おほぶねにまかぢしじぬきときまつとわれはおもへどつきぞへにける

汝時を待のみにすぐる程に月を重ねたる也

欲乎奈我美伊能年良延奴爾安之比奇能山妣故等余米佐乎思賀奈君母

よをながみいのねらえぬにあしびきのやまびことよめさをしかなくも

とよめハとよませの約言

肥前國松浦郡狛島亭船泊之夜遙望海浪各慟旅心作歌七首

可敝里伎弖見牟等於毛比之和我夜等能安伎波疑須須伎知里爾家武可聞

かへりきてみんとおもひしわがやどのあきはぎすゝきちりにけんかも

やまくみんと契りしとハ妹をちぎりし心をふくむとおもひこゝろを云

右一首秦田麻呂

安米都知能可未乎許比都都安禮麻多武波夜伎萬世伎美麻多婆久流思母

あめつちのかみをこひつゝあれまたんはやきませきみまたばくるしも

こひつゝハ乞つゝ、あれハ吾之

右一首娘子

是ハあそびの列の中のをとこくに遣しをおくられつれど定也

舟わたる所の娘子なるべし、下ニ對馬娘子名玉槻とくくにあるに同くまし寄といふか

伎美乎於毛比安我古非萬久波安良多麻乃多都追奇其等爾與久流日毛安良自

きみをおもひあがこひまくハあらたまのたつきごとによくるひもあらじ

よくるハ除けるなり、一日もおちずといふ程ノことなり、又ハそこ大夫の思ひおやあらん

秋夜乎奈我美爾可安良武奈曽許己波伊能禰良要奴毛比等里奴禮婆可

あきのよをながみにかあらんなぞこゝばいのねらえぬもひとりぬればか この

歌のちきはかくのかさく粉めれバ何ぞこゝばくいねがてにするぞと、四の句の上の

詞ハ助辞のみ

多良思比賣御舶波弖家牟松浦乃宇美伊母我麻都敝伎

月者倍爾都都

たらしひめみふねはてけんまつらのうみいもがまつべきつきはへにつゝ

たらしひめハ神功皇后を申奉る、まつらの海を上よりいひかけ、まつるといはんとて也

へにつゝハ経去て也（へゆき）

多婢奈禮婆於毛比多要弖毛安里都禮杼伊敝爾安流伊

毛之於母比我奈思母

たびなればおもひたえてもありつれどいへにあるいもしおもひがなしも

旅なれバ思ひ絶てすみをき妹が思ひをおもひやりて悲しきと也、妹しのしハ

しもとのしハ詞也

安思必寄能山等妣古由留可里我禰波美也故爾由加波

伊毛爾安比弖許禰

あしびきのやまとびこゆるかりがねはみやこにゆかばいもにあひてこね

雁によせて意味よくきこゆれバこと也

到壹岐島雪連宅滿忽遇鬼病死去之時作歌一首并短

歌

宅まろと共に旅行し人のよめる也

須賣呂伎能等保能朝廷等可良國爾和多流和我世波伊

敝妣等能伊波比麻多禰可多太未可母安夜麻知之家牟

安吉佐良婆可敝里麻左牟等多良知禰能波波爾麻乎之弖

すめろぎのとほのみかどゝからくにゝわたるわがせはい

へびとのいはひまたねかたゞみかもあやまちしけん

㪚ヲ散ニ误

あきさらバ。うつりまさんと。たらちねの。はゝにまうし
豆等伎毛須疑。都奇母倍奴禮婆。今日可許牟。明日可蒙許
て。ときしもすぎ。つきもへぬれバ。けふかこん。あすかこ
武登。伊㪚比等波。麻知故布良牟爾。等保能久爾。伊麻太毛
むと。いへびとは。まちこふらんに。とほのくに。いまだも
都可受。也麻等乎毛。登保久左可里豆。伊波我禰乃。安良伎
つかず。やまとをも。とほくさかりて。いはがねの。あらき
之麻禰爾。夜杼里須流君
しまねに。やどりするきみ

三韓をしるしてみつぎしてとほのみかどとあがめしを。これまでねのはまつねだとのの
界なたゞみをしるはすしへ務てつかふての要を奇としおくるところのゆ古之がゆ
みおやきみをしまふちふらばふなあまりにのふらんぞ和賀多ゝ弥由采許㑹（ワガタヽミユメコト）

波婆ヲ婆波ニ误

表許曽多ゝ美（シコソヌ）とはあかつまハゆあとあつるふく然しそその俗その枕ことあて
きびしく第をて掃ひのしよしなのふし、そが太未を大未ゑ語れて、麻手之の
手を一本字ゑ作るまゝをしとふこて正しき、遠の国ハ新羅をいふ、岩のねのきゝハ、
あるこの岩をのひく、實ハ死さるをやどりせるさまをのひぬしお

反歌二首

伊波多野爾。夜杼里須流伎美。伊敝比等乃。伊豆良等和禮
乎。等波婆伊可爾伊波牟
いはたのに。やどりするきみ。いへびとの。いづらとわれを。とはゞいかにいはん
和名抄ニ波石田郡石田にあり伊之太とよめハ此のとふへ語あるべし、やどりするを
るとハこゝハ葬の地をいふ、これをハ友人の自らのことゞを我ふとのぞきをと乎と
ゆへりハく等婆波とよこハ語くて下よるゑなれるゝ

与能奈可波。都禰可久能未等。和可禮奴流。君爾也毛登奈。

安我孤悲由加牟
よのなかハつねのみとやのれぬらきみまや　かくなあくのこひゆらん
上三句ハ世界ハ皆かくのみきまるひとつのことゝハとそのことの（…）ハ天ニ立つ（…）ように

右三首挽歌

天地等登毛爾母我毛等於毛比都都安里家牟毛能乎波
あめつちとゝもにもがもとおもひつゝありけむものをは
之家也思伊敝乎波奈禮弖奈美能宇倍由奈豆佐比伎弖
しけやしいへをはなれてなみのうへゆなづさひきて
呂安良多麻能月日毛伎倍奴可里我禰母都藝弖伎奈氣
てあらたまのつきひもきへぬかりがねもつぎてきなけ
婆多良知禰能波波母都末良母安佐都由爾毛能須蘇比
ばたらちねのはゝもつまらもあさつゆにものそそひ

都知由布疑里爾巳呂毛弖奴禮弖左伎久之毛安流良牟
つちゆふぎりにころもでぬれてさきくしもあるらん
其登久伊低見都追麻都良牟母能乎世間能比登乃奈氣
ごとくいでみつゝまつらんものをよのなかのひとのなげ
伎波安比於毛波奴君爾安禮也母安伎波疑能知良敝流
きハあひおもハぬきみにあれやもあきはぎのちらへる
野邊乃波都乎花可里保爾布伎弖久毛婆奈禮等保伎久
のべのはつをばなかりほにふきてくもばなれとほきく
爾敝能都由之毛能佐武伎山邊爾夜杼里世流良牟
にべのつゆしものさむきやまべにやどりせるらん

天地とゝもにハ宅満が歎ちくとみゆるなりし之ハ浪のうへゆハ壱岐島へ渡りてきさ
海路をへてゆきしことをいふ月日もきへぬハ年五ケ月をへてその吉信由久等志乃とよ

こゝろゆく来経ゆるに、船舟にまゝハ母も妻も宅満を門に立待さまとハ是
二ちあすに船舟にまゝハひでゝ夕霧に我ハぬれてよらんか、さきくしもある
らんめぐハ宅満がみちゆきしきて和幸くあらん人のあくぶといふ、あひお
もはゞハ母妻をもし思ひぞくひとりもなしといふ也、男にあれどハ男にあれバ
ゆやといふことハ旅する時、男ハ宅満をさして、ちらくるハ船なると延之、神と
花のみかにふきて八握の伎華の身にあらぐ、葉城に表序を造てるさま
まるべし、霊だるれハ古事記仁徳濤云、やまべにふきあげく玖毛婆那礼
そきにかとこそれもそれならやとあらく、霊なるに離れ去ることにて、君きの向伏
国なぞといふらしやどりせるらんハ美行るをといふ、男にあれやもとよに
いつるにわらく、絶をえ年と待でき

反歌二首

波之家也思都麻毛古杼毛母多可多加爾麻都良牟伎美

也之麻我久禮奴流

はしやしつまもこどかにたゞくふまつらんきみや、こまがくれぬる

たゞく遠く中むさえ既に出、こまがくれぬるハ船の島々の陰にかくれ行ぬ

ふやどりもちるちといつるめぐ、君も華なるをいふ

毛美知葉能知里奈牟山爾夜杼里奴流君乎麻都良牟比等之可奈思母

もみぢばのちりなんやまにやどりぬるきみをまつらんひとしかなしも

もみぢ葉の散なんの陰に、旅寝のやどりしてさゝぐ　やどりせるらんといふ事にて、君ハ

宅満をさし、人ハ家人をさして

右三首葛井連子老作挽歌

和多都美能可之故伎美知乎也須家口母奈久奈夜美伎

わたつみのかしこきみちをやすけくもなくなやみき

弖伊麻太爾母毛奈久由可年登由吉能安末能保都手乃
ていまだにももなくゆかんとゆきのあまのほつての
宇良敝乎可多夜伎弖由加武土須流爾伊米能其等美知
うらへをかたやきてゆかんとするにいめのごとみち
能蘇良治爾和可禮須流伎美
のそらぢにわかれするきみ

やすくもなくは安きこともなく也、もなくゆかんとは平安にゆかんと也、まさきく
安くてあらんをいふ也、喪もなくもあらんと也、いまだにも事なくあらん也、ゆきの
あまは壱岐の海人也、ほつてのうらへは、ほつは秀(ホ)つ、手は語る語なく、神代紀に
太占をふとまにといへる太の語と同じく、かむる詞也、うらへは占合也、かたやきて、
占也むかしのは宇良敝可多也伎(ウラヘカキヤキ)といへるに須きめく、鹿の肩骨を灼
て焼占するをいへ、いめのごとくは夢のごとく、みちのそらぢは道の中空にて死るをいへり

反歌二首

年可之欲里伊比祁流許等乃可良久爾能可良久毛巳許
爾和可禮須留可聞
むかしよりいひけることのからくにのからくもこゝにわかれするかも
から国へおもむく事はもとより辛きをいひならはしたるにより、さてからく
いたくからきといひしも

新羅奇敝可伊敝爾可加反流由吉能之麻由加年多登伎
毛於毛比可禰都母
しらきへかいへにかかへるゆきのしまゆかんたどきもおもひかねつも
家にかへらん迷ひて、しらきへかゆかん家へかゆかんのこゝろも
おもひさだめかね、いかにゆくの詞をいへるにして皆のゆかんと
いふ也、たどきはたづきに同じ

右三首六鯖作挽歌　続紀宝字八年正月正六位上六人部連鯖麻呂よ
外従五位下を授くとみゆ、此人の氏と名とを思ふにかなしくを契けいふか

到對馬島淺茅浦船泊之時。不得順風。經停五箇日。於是
瞻望物華各陳慟心作歌三首

毛母布禰乃。波都流對馬能。安佐治山。志具禮能安米爾。毛
美多比爾家里

もゝふねのはつるつしまのあさぢやましぐれのあめにもみだひにけり

舟泊る津とうけたり、此国と続紀津島とあり、かみだひハもみぢを延いふか

安麻射可流。比奈爾毛月波。弖禮禮杼母。伊毛曾等保久波。
和可禮伎爾家流

あまざかるひなにもつきはてれゝどもいもぞとほくはわかれきにける

妹をぞ遠くのこと、去年八月より周防国にてハ君が有りとへだてきまかれ

安伎左禮婆。於久都由之毛爾。安倍受之弖。京師乃山波。伊
呂豆伎奴良牟

あきされバおくつゆじもにあへずしてみやこのやまハいろづきぬらん

京家ゟ離しく、なつの京の山ハ霜月ぬしくと之

竹敷浦船泊之時各陳心緒作歌十八首　続紀第十三對馬
島上縣郡竹敷埼とみえたり

安之比奇能。山下比可流。毛美知葉能。知里能麻河比波。計
布仁聞安留香母

あしびきのやましたひかるもみぢばのちりのまがひはけふにもあるかも

去年秋の初めに出立しひかり待ちて花咲きところ、去年十秋山の紅葉のちるを
どのひく、此歌の詞ハ赤く照すとて八信字ふくむといふ山そこのことふあるべし、
去年三山下の赤のその母の方ふ宮ち征と筆く…くいふ、去年かたぐるふ

こゝをおもへるしまのおもしろき所をわすれじといへるのこゝろ

右一首大使

多可之伎能。母美知乎見禮婆。和藝毛故我。麻多牟等伊比
之等伎曽伎爾家流

たかしきのもみぢをみれば。わぎもこが。またんといひしときぞきにける

右一首副使

多可思吉能。宇良未能毛美知。和禮由伎弖。可敝里久流末
低知里許須奈由米

たかしきのうらまのもみぢ。われゆきて。かへりくるまで。ちりこすなゆめ

緋國へ行て還るまでかはらでおちりこそとねがふ也

右一首大判官

多可思吉能。宇敝可多山者。久禮奈為能。也之保能伊呂爾。

奈里爾家流香聞

たかしきのうへかたやまはくれなゐの。やしほのいろになりにけるかも

うへかた山も竹敷同所と見ゆ

右一首少判官

毛美知婆能。知良布山邊由。許具布禰能。爾保比爾米低弖。
伊低弖伎爾家里

もみぢばの。ちらふやまべゆ。こぐふねの。にほひにめでて。いでてきにけり

ちらふハちるを延いふ。ふねに紅葉のかゝりてにほへるをいふ也

こぐ舟を娘子にたとへてよめる也

多可思吉能。多麻毛奈婢可之。己藝低奈牟。君我美布禰乎。
伊都等可麻多牟

たかしきのたまもなびかし。こぎでなん。きみがみふねを。いつとかまたん

右二首對馬娘子名玉槻(タマツキ)
多麻之家流伎欲吉奈藝佐乎之保美弖婆安可受和禮由
久可反流左爾見牟
たましける　きよきなぎさを　しほみてば　あかずわれゆく　かへるさにみん
汐干なればまたこそ見んとゝ
右一首大使
安伎也麻能毛美知乎可射之和我乎禮婆宇良之保美知
久伊麻太安可奈久爾
あきやまの　もみぢをかざし　わがをれば　うらしほみちく　いまだあかなくに
礒山のもみぢの見あかぬに浦ハ汐の満来れバ舟を寄せよとよめるなるべし
右一首副使
毛能毛布等比等爾波美要緇之多婢毛能思多由故布流

爾都奇曾倍爾家流
ものもふと　ひとにはみえじ　したひもの　したゆこふるに　つきぞへにける
下ハ胸中にて人を忘るゝの思ひもなくてあるまじとぞ下細く下よる
とのむんことあるまうけなり
右一首大使
伊敝豆刀爾可比等比里布等於伎敝欲里與世久流奈美
爾許呂毛弖奴禮奴
いへづとに　かひをひりふと　おきべより　よせくるなみに　ころもでぬれぬ
之保非奈波麻多母和禮許牟伊射遊賀武於伎都志保佐
爲多可久多知伎奴
しほひなば　またもわれこん　いざゆかん　おきつしほさゐ　たかくたちきぬ
此一首さきよりこゝが濁るべくとよめる、さきさきて

和我袖波多毛登等保里弖奴禮奴等母故非和須禮我比
等良受波由可自
わがそでハたかとほりてぬれぬともこひわすれがひとらずハゆかじ
巻二ちらハ衣の袖ハ通りてぬれぬとよめり下ハ我かさねさる衣の袖まで沾とある
をりよ

奴波多麻能伊毛我保須倍久安良奈久爾和我許呂母弖
乎奴禮弖伊可爾勢牟
ぬばたまのいものほすべくあらなくにわがころもでをぬれていかにせん
ぬばたまの枕とうつ下の嬬く寝の一夜もまで久しふし為ハいもれき室もなきハ
十一の巻にぬばたまの妹が黒髪こと夜もか吾なき床になびくらめる
なるべし。このふうくに嬬とてくくぎよしなすしとあり猶考べし

毛美知婆波伊麻波宇都呂布和伎毛故我麻多牟等伊比

之等伎能倍由氣婆
もみぢばハいまハうつろふわぎもこがまたんといひしときのへゆけば

安伎佐禮婆故非之美伊母乎伊米爾太爾比左之久見牟
乎安氣爾家流香聞
あきされバこひしみいもをいめにだにひさしくみんをあけにけるかも
秋ハ夜ながきと契しぬれバいとど恋しく思ふ妹を、夢にだに
ひさしくみんと思ふにあやにくに夜の明ぬるを歎くなり

比等里能未伎奴流許呂毛能比毛等加婆多禮可毛由波
牟伊敝杼保久之弖
ひとりのみきぬるころものひもとかバたれかもゆハんいへどほくして
古へハあれバ妻下紐を結びつると、独寝して衣の紐をとききるバ、旅の
語なんどえ

安麻久毛能多由多比久禮婆九月能毛美知能山毛宇都呂比爾家里
あまぐものたゆたひくればながつきのもみぢのやまもうつろひにけり
巻十二天雲のたゆたひやすき心あらばと有て、こゝはたゆたふ日数をふるをいへり、
もみぢの山ハ紅葉する山をいふ、卯の花山とよめる類ひ也、うつろふハ散るをいへり
多婢爾弖毛母奈久波也許登和伎毛故我牟須比思比毛波奈禮爾家流香聞
たびにてももなくはやことわぎもこがむすびしひもはなれにけるかも
喪なく早くかへりませとく
回来筑紫海路入京到播磨國家島之時作歌五首
家嶋ハ播磨に有
伊敝之麻波奈爾許曽安里家禮宇奈波良乎安我古非伎都流伊毛母安良奈久爾
いへしまはなにこそありけれうなはらをあがこひきつるいももあらなくに
家嶋の名のよろしきハ名のミにて恋し妹もあらぬと也
久左麻久良多婢爾比左之久安良米也等伊毛爾伊比之乎等之能倍奴良久
くさまくらたびにひさしくあらめやといもにいひしをとしのへぬらく
其年だにこの冬経ぬるなれど、おほよそ年の経ぬるよしなる
和伎毛故乎由伎弖波也美武安波治之麻久毛爲爾見延奴伊敝都久良之母
わぎもこをゆきてはやみむあはぢしまくもゐにみえぬいへづくらしも
よそにおきてやもたまんといへつのむしてとよめり、いへづくハ家つく也
奴婆多麻能欲安可之母布禰波許藝由可奈美都能波麻

延ヲ廷ニ誤

末都麻知故非奴良武
ぬばたまのよあかしもふねはこぎゆかなみつのはままつまちこひぬらん
夜すがら舟こぎゆかん也。いざこどもはやくやまとへ大伴のみつの濱松
こひぬらん
大伴乃美津能等麻里爾布禰波弖々多都多能山乎伊都可故延伊加武
おほとものみつのとまりにふねはてゝたつたのやまをいつかこえいかん
大ともの枕詞、難波の湊をいふ。此舟泊りて立田越して都へのぼらんとて
中臣朝臣宅守與狹野茅上娘子贈答歌　目録ニ中臣朝臣
宅守娶藏部女嬬狹野茅上娘子之時、勅断流罪配越前國也、於是夫婦相
嘆易別難會各陳慟情贈答歌六十三首とあり。此端詞ふるき本に茅一本弟
子作る。目録も同じ、續紀天平十二年六月十五日大赦云々、中臣宅守等不在

洽ヲ治ニ誤

赦限、天平宝字六年正月從六位上中臣朝臣宅守ニ從五位下を授よし見ゆ
安之比奇能夜麻治古延牟等須流君乎許許呂爾毛知弖
夜須家久母奈之
あしびきのやまぢこえんとするきみをこゝろにもちてやすけくもなし
まての越路こえつらんほどはのんなあれが安からぬと也
君我由久道乃奈我氐乎久里多多祢也保呂煩散牟安米能火毛我母
きみがゆくみちのながてをくりたゝねやきほろぼさんあめのひもがも
ながては遠道、道の長きと云、ねいつるへくりたゝねのくりハたぐりよせ、
たゝねハたゝむるといふと同じ語の活用へ、やきほろぼさんをよせて焼失りん
天の火もあれかしといふ也
和我世故之氣太之麻可良婆思漏多倍乃蘇低乎布良左

禰見都追志努波牟
わがせこがけふまゐらバしろたへのそでをふらさねみつてしぬばん
くぐしハ袖のことふらさねハふれをといふ
巳能許呂波古非都追母安良牟多麻久之氣安氣呂手知欲
利須辨奈可流倍思
このごろハこひつゝもあらんたまくしげあけてをちよりすべなかるべし
まだあはぬほどハ恋つゝもあらんを明日よりハせんかたなからんと也
右四首娘子臨別作歌
同じく臨別娘子悲嘆作哥とぞ
知里比治能可受爾母安良奴和禮由惠爾於毛比和夫良
牟伊母我可奈思佐
ちりひぢのかずにもあらぬわれゆゑにおもひわぶらんいもがかなしさ
上ハ塵土の数ならぬわれゆゑにおもひわぶらんいもがかなしさと也

安乎爾與之奈良能於保知波由吉余家杼許能山道波由
伎安之可里家利
あをによしならのおほぢハゆきよけどこのやまみちハゆきあしかりけり
おほぢハ京の大路をいへバゆきよけれど遠くゆきよけどいへり此山道ハ越へがたし
むくさん
宇流波之等安我毛布伊毛乎於毛比都追由氣婆可母等
奈由伎安思可流良武
うるはしとあがおもふいもをおもひつゝゆけばかもとなゆきあしかるらん
あがおもふいもハ吾妹也かもとなハ徒のよしなの意此かもなの詞ハ
三の句のうへへよりて心得べしよの事の次第ありとみゆこ
居るさまにあらはれて悲しきを見よし

加思故美等能良受安里思乎美故之治能多武氣爾多知
弖伊毛我名能里都
かしこみとのらずでありしをみこしぢのたむけにたちていもがなのりつ
うしまゆゑく[illegible]ゐらするれバ妹無しとことさがなしと山よて来りて
起しをうつ[illegible]くバ妹が名を呼つること日本武のみことのあづまハやと
のたまひし類ひたむけハ峯坂をなくのたむけといひ、碓氷坂山を
も御山といへる如く、越路へ入山のたむけをいへり、妻神ニさゝぐるを手向と
はいはさるゝ多向なるべしといへり
右四首中臣朝臣宅守上道作歌
於毛布恵爾安布毛能奈良婆之末思久毛伊母我目可禮
弖安禮乎良米也母
おもふゑにあふものならバしましくもいもがめかれてあれをらめやも

おもふゑにハ思ふ故なる、思ふのまゝにあふてあるならバしばらくも妹をば離れ
てをらんやといふ也
安可禰佐須比流波毛能母比奴婆多麻乃欲流波須我良
爾禰能未之奈加由
あかねさすひるハものおもひぬばたまのよるハすがらにねのみしなかゆ
和伎毛故我可多美能許呂母奈可里世婆奈爾毛能母氐
加伊能知都我麻之
わぎもこがかたみのころもなかりせバなにものもてかいのちつがまし
等保伎山世伎毛故要伎奴伊麻左良爾安布倍伎与之能
奈伎我佐夫之佐
とほき山せきもこえきぬいまさらにあふべきよしのなきがさぶしさ
一云左必之佐　さぶしさは不怜不楽をいへり

於毛波受母。麻許等安里衣年也。左奴流欲能。伊米爾毛伊母我美延射良奈久爾

おもはずも、まことありえんや、さぬるよの、いめにもいもが、みえざらなくに

一二の句ハおもはずしてあらんやといふ又まことに何ぞかくおもはるゝぞよと

まのあたりによらぬ白花もあるべし是の二の句ハあらんとハ云ぬよし也

みえざらなくにの事ハ詞なく見えざる也といふ事第十四をつくる也の三所さ

このまよきるのめゆつゐをとへんさね射良奈久尓とよめさくハ発語なく

夜ざるなく又夢のみえぬるにもよまれたるハ今の世にもかよふよの事也

等保久安禮婆。一日一夜毛。於母波受弖。安流良牟母能等。於毛保之賣須奈

とほくあれば、ひとひひとよも、おもはずて、あるらんものと、おもほしめすな

此ハ写して、あつまり行とおもはれとゝ

比等余里波。伊毛曽母安之伎。故非毛奈久。安良末思毛能乎。於毛波之米都追

ひとよりは、いもぞもあしき、こひもなく、あらましものを、おもはしめつゝ

人よりハ他し人よりハ也妹があくハ我に恋するといふこともなくてあらんをかく

おもはしむるハ妹のあしきといふ也

於毛比都追。奴禮婆可毛等奈。奴婆多麻能。比等欲毛意知受。伊米爾之見由流

おもひつゝ、ぬればかもとな、ぬばたまの、ひとよもおちず、いめにしみゆる

おもひつゝぬればぞこのハおもひく寝る夜ことに夢のといふ也

可久婆可里。古非牟等可禰弖。之良末世婆。伊毛乎婆美受曽安流倍久安里家留

かくばかり、こひんとかねて、しらませば、いもをばみずぞ、あるべくありける

安米都知能可未奈伎毛能爾安良婆許曽安我毛布伊毛爾安波受思仁世米
あめつちのかみもなきものにあらばこそあがおもふいもにあはずしにせめ
巻四天地の神てふことわりなくハこそわがおもふ妹にあはずて死せめとよめるに同し
伊能知乎之麻多久之安良婆安里伎奴能安里弖能知爾毛安波射良米也母
いのちをしまたくしあらばありきぬのありてのちにもあはざらめやも
命をしまたくしのまたくしハ脚解之、ありきぬハ巻十四巻十六まで出
ここハ有てといはん為のミ
一云安里弖能乃知毛
安波牟日乎其日等之良受等許也未爾伊豆禮能日麻弖
安禮古非乎良牟
あはむひをそのひとしらずとこやみにいづれのひまであれこひをらむ
巻二にとこやみを日のめも見ずてとこやみにてをる日をと闇き見えずてある
なのみこそまでよめり
多婢等伊倍婆許等爾曽夜須伎須久奈久毛伊母爾戀都
都須敝奈家奈久爾
たびといへばことにぞやすきすくなくもいもにこひつゝすべなけなくに
妹にこひつゝすべなくもあるけなくをとのべし、すべなけハせんすべなきこと
またすくなくもすべなけなくをといふハ、すべなさのすくなくてあら
ぬといふこと、巻十一にいはゞ耳にするやすしすくなくもこのあひ我念にて
九ニ、巻十二人目多み同こそ嘉ずれすくなくもこの吾念英國ともに
すくなくもおもひハなきをといはずく多く思ふて在と同し、巻一五百葉歿
久尓といへる事もいひつ

和伎毛故爾古布流爾安禮波多麻吉波流美自可伎伊能知毛乎之家久母奈思

わぎもこにこふるにあれバたまきはるみじかきいのちもをしくもなし

宅守る子我若之

右十四首中臣朝臣宅守

目録ニ至配所ニ作哥と有

伊能知安良婆安布許登母安良牟和我由惠爾波大奈於毛比曾伊能知多爾敝波

いのちあらバあふこともあらんわがゆゑにおもひそいのちだにへバ

はてハまことをいはず同じこゝに得く用ひし也いのちだにへバ命だにあらバと云て

初るをとうちゝへしいつるこ

比等能宇宇流田者宇惠麻佐受伊麻佐良爾久爾和可禮之弖安禮波伊可爾勢武

ひとのうゑるたハうゑまさずいまさらにくにわかれしてあれハいかにせん

人の業とする田をも強ひて国遠くおはさば吾ハ何とたづきもして

あらんとぞ

和我屋度能麻都能葉見都都安禮麻多無波夜可反里麻世古非之奈奴刀爾

わがやどのまつのはみつゝあれまたんはやかへりませこひしなぬとに

松を待とかけたり、こゝにはやかへりませといふ同じ、継體紀三の志づくろうま

いねし度に、壱十わがせこをまでせの山の峰子さる君咲くせ君の又ぬら伝

比等久爾波須美安之等曾伊布須牟也氣久波也可反里麻世古非之奈奴刀爾

ひとくにハすみあしとぞいふすむやけくはやかへりませこひしなぬとに

ひとくにハ他国也、すむやけくハ速也

比等久爾爾伎美乎伊麻勢弖伊都麻弖可安我故非乎良牟等伎乃之良奈久
ひとくにゝきみをいませていつまでかあがこひをらんときのしらなく
いませてハ往ませてなり　ひとくにハ遠き國のよしにて、ハきみん京のむれぬる

安米都知乃曾許比能宇良爾安我其等久伎美爾故布良牟比等波左禰安良自
あめつちのそこひのうらにあがごとくきみにこふらんひとはさねあらじ
そこひハ集中にそきへのそきといへるそきると同じ、そきハ祝詞ニ國の退立限と見え同しく天地の涯りをいふ、そこひのひハ方の語ならく、そこ侘といふべきを半濁まじりのやうに唱ふるなり、うらハ裏にて、たぬハまことゝ也

之呂多倍能安我之多其呂母宇思奈波受毛弖禮和我世故多太爾安布麻弖爾
しろたへのあがしたごろもうしなはずもてれわがせこたゞにあふまでに
下衣をねゑへるを下衣よりさしかへてれハ持てあれく

波流乃日能宇良我奈之伎爾於久禮爲弖君爾古非都都宇都之家米也母
はるのひのうらがなしきにおくれゐてきみにこひつゝうつしけめやも
まのりのちきよれくれゐくたれバ汝のかちせんやと、え些十二君におくれ
てうつしくめやもとしよめつけめハからめの約之

安波牟日能可多美爾世與等多和也女能於毛比美多禮弖奴敝流許呂母曽
あはんひのかたみにせよとたわやめのおもひみだれてぬへるころもぞ
逢ん日までのかたみ、たをやめハたをやめに同じ、衣を縫たるを

右九首娘子

過所奈之爾世伎等婀古由流保等登藝須多我子爾毛夜
麻受可欲波牟
ふみなしにせきとびこゆるほとゝぎすて
やまずてかよはん
過所ハ公式令関市令なとに見えて関をこゆる人のもたるしのふみ也今の手形
といふものゝ如く也。されバこゝハふみなしにたゞちに
こゆるとよむべきを、多我子尓毛をあまたがこにもと訓れどよしなし
此歌のさまをおもふに二字ありて従ふべきなり多ハ和子ハ未の誤まれ尓毛
の下可毛の二字脱しゝ。然らバわがみにてもと訓べしと翁いはれき。ちん
ハ郭公ハ通ひもなく関を越れバこそ身もなく我こそ関越く
通はんとし
宇流波之等安我毛布伊毛乎山川乎奈可爾敝奈里氐夜
須家久毛奈之
うるはしとあがもふいもをやまかはをなかにへなりてやすけくもなし
うるはしハ愛の字をかく、くゝりと同じ続く
牟可比為氐一日毛於知受見之可杼母伊等波奴伊毛乎
都奇和多流麻氐
むかひゐてひとひもおちずみしかどもいとはぬいもをつきわたるまで
ひとひぬハあかざる心月渉るまで見れどもあかぬといふこゝろ
安我未許曽世伎夜麻故要氐許己爾安良米許己呂波伊
毛爾與里爾之母能乎
あがみこそせきやまこえてこゝにあらめこゝろハいもによりにしものを
砥浪の関山なるべし
佐須太氣能大宮人者伊麻毛可母比等奈夫理能未許能
美多流良武

さすたけのおほみやびとはいまもかもひとなぶりのみこのみたるらん

さすたけの枕詞、娘子がるをみなりくなれしをなぶるなるべし　遊仙窟

劇をひとなぶりとよめり

一云伊麻左倍也　この句え

多知可敝里奈氣礼毛安禮波之流思奈美於毛比和夫禮

呂奴流欲之曽於保伎

たちかへりなけどもあれはしるしなみおもひわぶれてぬるよしぞおほき

しるしなみはしるしなくし、わぶれはうらぶれを略之

左奴流欲波於保久安禮杼毛毛能毛波受夜須久奴流欲波

佐禰奈伎母能乎

さぬるよはおほくあれどもものもはずやすくぬるよはさねなきものを

ぬる夜は多くあれど、物思はで安く寝る夜は實になきと也

與能奈可能都年能巳等和利可久左麻爾奈里伎爾家良

之須惠之多禰可良

よのなかのつねのことわりかくさまになりきにけらしすゑしたねから

世間の道理や是様に来ぬるならん、まかぬ種の流のごとく

てうらみ故之遠つ祖に出づるしを商鞅く國を亡す事もあるを歎くならん

あはれき道あるに依るてたねのことんで末の種を蒔をするの

それいつされば己がちしる業因かへくとはまさるくの世

のきまのめたれはもえぬるし誘ふしといふは此説のうさ穏なるべし

和伎毛故爾安布左可山乎故要弖伎奈伎都都乎禮杼

安布余思毛奈之

わぎもこにあふさかやまをこえてきてなきつつをれどあふよしもなし

あふさかの名をたのめども逢よしのなきと也

多婢等伊倍婆許登爾曽夜須伎須敝毛奈久久流思伎多
婢毛許等爾麻左米也母

たびといへばことにぞやすきすべもなくくるしきたびもことにまさめやも

此上二句は上にもよめり、さるくるしき旅のくるしさをものべなどせぬをいひて、さて
くるしき旅も、吾妹子が事を思ひくるしてあらんにはまさらじとなり、かへつて
あきらけし

山川乎奈可爾敝奈里弖等保久登母許己呂乎知可久於
毛保世和伎母

やまかはをなかにへなりてとほくともこころをちかくおもほせわぎも

此二句よくきこゆ、句中はへだてるとなり

麻蘇可我美可氣弖之奴敝等麻都里太須可多美乃母能
乎比等爾之賣須奈

まそかゞみかけてしぬべとまつりだすかたみのものをひとにしめすな

まそ鏡はかけてといはん枕詞のみ、かく形見の鏡は、ありなるべし、次の云の
下紐は借字にて、しるしはまたく後なるを知るべし、太の下須は類の誤なるべし、まつ
るなりしと、前にいれき宣云まつたゞに紀に奉遣をたてまつると
訓るまつりだすは別ての事なるをいふべし、しめすを見せるといふべし
うれしくも人に見せそれとなり

宇流波之等於毛比之於毛婆波之多婢毛爾由比都氣毛
知弖夜麻受之努波世

うるはしとおもひしおもはゞしたびもにゆひつけもちてやまずしぬばせ

たゞこの形見の衣を下紐に結付けよとなり

右十三首中臣朝臣宅守

多麻之比波安之多由布敝爾多麻布禮杼安我年禰伊多

之古非能之氣吉爾
たましひはあしたゆふべにたまふれどあがむねいたしこひのしげきに
男の魂をば吾にまかせてあたふれどものこゝろ也 あがむねのみさまゝわびしくまさるべし
恋のかなしさをさけたまふな
已能許呂波君乎於毛布等須敝毛奈伎古非能未之都都
禰能未之曾奈久
このごろはきみをおもふとすべもなきこひのみしつゝねのみしぞなく
君をおもふとゝいふに
奴婆多麻乃欲流見之君乎安久流安之多安波受麻爾之
弖伊麻曾久夜思吉
ぬばたまのよるみしきみをあくるあしたあはずまにしていまぞくやしき
あはずまにてといふ まは助辞 まくあはずしてといふと

いつかこりむまとふくは同じく こゝろえゝく まは助辞なれば例とすべし
安治麻野爾屋杼禮流君我可反里許武等伎能牟可倍乎
伊都等可麻多武
あぢまぬにやどれるきみがかへりこんときのむかへをいつとかまたむ
和名抄越前今立郡味真阿知末 とあるべし
宮人能夜須伊毛禰受弖家布家布等麻都良武毛能乎美
要奴君可聞
みやびとのやすいもねずてけふけふとまつらんものをみえぬきみかも
宮人といへるは宮中の友をさせるの、よき人なるのことゝするらんとよめる也
大宮人といへるとおなじや 又或人宮は家の字の誤なるべしといへり 家人と
あらんかたおもしろきや
可敝里家流比等伎多禮里等伊比之可婆保登保登之爾

吉君香登於毛比弖

かへりけるひときたれりといひしかバほと〳〵しにききみかとおもひて

人ハ使をいふべし、ほと〳〵ハ書紀に五百さゝの復将変八方殆子、書七ほと〳〵

ほと〳〵しくふるま斧とられぬとよみそのふいてしにきハ死みき、

殆に暁ひく魂まどひきたるなり

君我牟多由可麻之毛能乎於奈自許等於久禮弖乎禮杼與伎許等毛奈之

きみがむたゆかましものをおなじことおくれてをれどよきこともなし

君とたぐへおもひてハ本のゆくとなるゝと翁いへれき桜するぬのことたゞならず

期等ハ濁音を用べし況ふよき許等なるゝといふて用しつると用ひれバ、

許ハ清べきなるを、是ハ君て流されゆしをひも、おくれをるをひも甲

事なく、おくれおりてよきこともなしといふことなるべし

和我世故我可反里吉麻佐武等伎能多米伊能知能己佐牟和須禮多麻布奈

わがせこがかへりきまさんときのためいのちのこさんわすれたまふな

吾命をおしむこゝろえ

右八首娘子

安良多麻能等之能乎奈我久安波射禮杼家之伎許巳呂乎安我毛波奈久爾

あらたまのとしのをながくあはざれどけしきこゝろをあがもはなくに

けしきハ化しくすめるべし

家布毛可母美也故奈里世婆見麻久保里爾之能御馬屋乃刀爾多弖良麻之

けふもかもみやこなりせばみまくほりにしのみまやのとにたてらまし

此娘子が家右馬寮のほとりにありしなるべし。とハ外へ。考ニ十七にかくつゞけしと外ト
たてめやもとよめり

右二首中臣朝臣宅守　目録ニ宅守の下更贈哥とあり

伎能布家布伎美爾安波受弖須流須敝能多度伎乎之良
爾禰能未之曽奈久

きのふけふきみにあはずてするすべのたどきをしらにねのみしぞなく

為るすべハ為べくせんかたもなく、よるところもなきをいへり。たどきハたづきとおなじ
也初句ハまへにいへり

之路多倍乃阿我許呂毛弖乎登里母知弖伊波敝和我勢
古多太爾安布末低爾

しろたへのあがころもでをとりもちていはへわがせこたゞにあふまでに

形見の衣をとりて祈齋るなり。この党にまちてあへとよめり。ぬのかくの

我ころもを斎留めん

右二首娘子　目録ニ娘子の下和贈哥とあり

和我夜度乃波奈多知婆奈波伊多都良爾知利可須具良
牟見流比等奈思爾

わがやどのはなたちばなはいたづらにちりかすぐらむみるひとなしに

古非之奈婆古非毛之禰等也保等登藝須毛能毛布等伎
爾伎奈吉等余牟流

こひしなばこひもしねとやほとゝぎすものおもふときにきなきとよむる

考十一こひしなばこひもしねとやたまぼこのみちゆく人にことも告なく、まさ
一二ハ同じくて、やがてもかのわがやどのつとしてよめらんとおぼしくよめり

多婢爾之弖毛能毛布等吉爾保等登藝須毛等奈那難吉
曽安我古非麻左流

たびにしてものもふときにほとゝぎすもとなゝなきそあがこひまさる

安麻其毛理毛能母布等伎爾保等登藝須和我須武佐刀爾伎奈伎等余母須

あまごもりものもふときにほとゝぎすわがすむさとにきなきとよもす

巻八雲ごもりとゆりて又面でてあまごもりとよめり皆同じく雨に隠り居る也

多婢爾之弖伊毛爾古布禮婆保登等伎須和我須武佐刀爾許欲奈伎和多流

たびにしていもにこふればほとゝぎすわがすむさとにこよなきわたる

こよは集中従此間とかきてこゆとよめるに同じ

許己呂奈伎登里爾曽安利家流保登等藝須毛能毛布等伎爾奈久倍吉毛能可

こゝろなきとりにぞありけるほとゝぎすものもふときになくべきものか

保登等藝須安比太之麻思於家奈我奈家婆安我毛布許己呂伊多母須敝奈之

ほとゝぎすあひだしましおけながなけばあがもふこゝろいたもすべなし

間暫おけへりこゝは甚しくて

右七首中臣朝臣宅守寄花鳥陳思作歌　此七そハ女な殿

たるみあらざるをとゝとゝる

萬葉集巻第十五

010190519304